九州大学総合研究博物館研究報告
Bull. Kyushu Univ. Museum
No. 9, 9-18, 2011

弥生時代開始年代再考Ⅱ
―青銅器年代論から見た―

岩永省三

Re-examination of the civil year of the beginning of Yayoi period（Ⅱ）

Shozo IWANAGA

九州大学総合研究博物館：〒812-8581　福岡市東区箱崎 6-10-1
The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

Ⅰ　はじめに

岩永は2005年3月に『九州大学総合研究博物館研究報告』第3号に、弥生時代開始年代を遡上させる歴博年代論を批判する立場から「弥生時代開始年代再考」（以下、「再考」とする）を発表した。その後も弥生実年代遡上論者によって、歴博年代論を支持する論考、補強を図る論考、歴博年代を古過ぎとして退けつつも弥生実年代遡上自体は事実として補強を図る論考が次々と公表された。それらによって「再考」を再考する必要があるとは考えていないが、それらの諸論考（すべてではないが）に対する所見を提示しておくのは、田中・溝口・岩永・Higham論考（2004）を補強する意味で無駄ではないと考えた。追加部分を組み込んで「再考」を全面的に書き改めることも考えたが、2005年以降現在に至るまでの研究史の問題点を、2004以前のそれと区別して明らかにしておくことに意味を認め、「弥生時代開始年代再考Ⅱ」として独立させた。

……

歴博年代論が提出されたごく当初には、「これはいけそうだ」という感触から、それを支持あるいは補強しようとする論者（A）が続出した。しかし時間の経過とともに、歴博年代があまりに古く引き上げ過ぎているということ、あるいはAMS法自体への批判や、AMS法で土器外面の煤を測定する方法に対する批判が強まったことなどの影響であろうか、歴博年代論とは意識的に距離を取って、歴博年代論は誤りだが考古学手続きによって従来の弥生年代観より遡上させること、特に中国東北地方における春秋・戦国系遺物と遼寧・朝鮮系遺物との共伴関係に基づいての立論は妥当とする論者（B）が増えてきた。私は2004年段階では、後にBの立場に替わった人の多くが当初はAであったことを踏まえてA・Bを区別していなかったが、庄田慎矢氏から区別すべきとの指摘を受けたので（庄田　2006）、従うことにする。ただし、「再考」および小稿の目的は、Aのみならず Bも論理展開に問題があることを明らかにすることであり、その点での変化はない。

歴博年代論をめぐる論争を振り返って奇異に感じる点は、弥生年代遡上論に反論する我々を、先進的な自然科学的方法に無理解・無知なうえに、いたずらに根拠が無い旧説に固執する保守反動的かつ頑迷固陋な輩であるかのように批判する人達がいることである。そうした人達は、我々が、土器に付着した煤のAMS年代測定を方法的に批判したうえ

で、人骨のAMS年代測定を、分析精度に世界的定評があるオックスフォード大学に依頼して行い、その成果を十分把握した上で、さらに海洋リザーヴァー効果等をも考慮したうえで年代論を展開していること、すなわち確たる根拠を手にした上で立論していることに、まったく言及しようとしない。自分に都合が悪い学説あるいは対立学説の不都合な部分を、学史から抹殺して無かったことにしてしまうという近年の日本考古学界の悪しき風潮が露呈したものと言えよう。歴博に比して分析数が少ないことを批判する人があるが、誤った方法（煤の年代測定）で何万点分析しても結果の正しさは何ら保証されない、という自明のことを再確認するまでもあるまい。

以下、「再考」のB～Eの諸章について補説していくことにする。

Ⅱ　遼寧式銅剣1式の年代幅について（「再考」ⅢBに対応）

以下、遼寧地方の遼寧式銅剣の型式名は、宮本一夫氏設定の1～4式（宮本2008a）、半島出土の遼寧式銅剣の型名は、宮本氏設定のAI～AV式（宮本2003a）を用いる。

遼寧式銅剣1a式ないしAI式は、その加工品の可能性が強い銅剣が、黄海南道大雅里石棺墓（「再考」図2⑱参照。以下、再2⑱のように略記。）・黄海北道仙岩里1号石棺墓（再2⑰）・大田市比来洞1号支石墓で共伴した土器・石鏃から、無文土器前期後半（欣岩里式）に置かれている（武末2004）。したがって遼寧式銅剣1a式ないしAI式の年代は、黒川式土器の下限ひいては弥生早期の開始年代を知る上で重要であり、遼寧式銅剣1a式ないしAI式の年代の上限のみならず下限にも注意が要ることは「再考」で詳述したので繰り返さない。

宮本氏は、比来洞支石墓の銅剣がAI式の分割品（AI'式）であることを強調し、遼東・遼西の1a式銅剣が前800年頃には出現していたことから、「朝鮮半島青銅器Ia段階の上限年代を前800年頃」とし、そこから弥生早期の開始年代を前8世紀とした（宮本2008a）。しかしそこに飛躍がある。AI式銅剣の年代は欣岩里式、列島との併行関係では黒川式の年代を示すのであって、弥生早期の開始年代は後続する休岩里式の年代として求めなければならないから一時期下降する。しかも前800年は1a式銅剣の上限年代であって、後続する1b式銅剣が前6世紀（宮本2008a）あるいは春秋後期（岡内2004）であることからすれば、下限は前6世紀の途中までの幅で考えなければならない。しかも後述するように、1b式に後続する2a式に相当する半島遼寧式銅剣のAⅡc式銅剣が平壌市新成洞石槨墓で休岩里式相当の土器を伴っているから、休岩里式の上限年代は6世紀以降に降らせるべきである。

Ⅲ　「遼寧式銅剣I式」と「V式」の関係について（「再考」ⅢCに対応）

宮本氏は、AVa式（宮本氏は（宮本2002）における半島出土遼寧式銅剣I～V式を、（宮本2003a）以降、AI～AV式に変更した。）を遼寧の遼寧式銅剣1a式ないし半島の遼寧式銅剣AI式に直接連続する段階に編年した（「再考」図4参照。以下、再4と略記。）。土器との併行関係では、AVa式が先松菊里式段階、AVb・AVc式が松菊里式段階とされている。AVa式とAI式が形態上類似することは事実であるから、この考えが妥当のようにも見える。しかし武末氏は、銅剣に共伴する石剣・石鏃・土器をも考慮し、AVa式を伴う松菊里（再2⑭）・雲岱里（再2⑯）、AVb式を伴う鎮東里（再2⑮）を無文土器中期後半（松菊里式期）に置き、AI式の再加工品とされる大雅里（再2⑱）・仙岩里1号（再2⑰）・比来洞1号（無文土器前期後半・欣岩里式期）（再4）との間に時間的ヒアタスを認めた。そしてその間の無文土器中期前半（休岩里式期）にⅢc式銅剣を含む龍興里遺跡出土品を置き、龍興里のⅢc式銅剣（再4）と松菊里のVa式銅剣（再4）との編年的位置付けを宮本氏と逆転させた。龍興里の位置は、類似する平面半円形飾玉を有する忠南白岩里遺跡での共伴土器によって無文土器中期前半併行期まで遡る可能性を考え、飾玉の平面半円形から勾玉形への形態変化から、龍興里と松菊里・槐亭洞・南城里と

の前後関係を傍証した（武末2004）。

これに対して宮本氏は、勾玉の形態による序列は無効であり、武末氏が龍興里並行（AⅢc式）とした白岩里の土器も無文土器中期後半（AVb・AVc式の時期）を遡らないから、AVa式がAⅢc式より新しくはならず、AVa式は1a式ないしAI式に連続すると反論した（宮本2008a）。

龍興里のAⅢc式銅剣（再4）は遼寧地方の遼寧式銅剣との併行関係で実年代がある程度判明するから（後述）、AV式銅剣をそれより前に置くか後ろに置くかによって、共伴土器（松菊里式）の年代、ひいては列島の弥生前期前半の実年代が大きく食い違うことになる。

武末氏が述べるように、遼寧式銅剣2a式ないしAⅢc式の無文土器編年上での位置づけを決めるのは良好な資料を欠くため難しいが、蓮華里・槐亭洞・南城里・草浦里で出土した半玦形飾玉と松菊里の飾玉は類似しており、半月形で抉りがない龍興里の玉をそれらの祖形とみなす考えは、他に半玦形飾玉の祖形の候補がない現状ではいまだ有効性を失っていない。

武末氏は、龍興里に並行する資料として白岩里遺跡の土器を掲げ、鉢が中期前半あるいは前期に遡ること、長頸壺が後期前半（水石里式）の壺より先行することを主張したが、宮本氏は、長頸壺が水石里式期の黒陶長頸壺に近似し「中期後半を遡り得ない」と反論した。確かに、無文土器中期から後期にかけての長頸壺の形態変化が詳細に判明しているわけではなく、武末氏が主張する龍興里と白岩里の平行関係は、飾玉の形態的類似性で繋ぐ点で不安があり、宮本氏が指摘するように白岩里の壺が水石里式期の壺に近いとも言える。しかし、龍興里のAⅢc式銅剣と併行するAⅡc式銅剣（本稿図1－8a）を出土した平壌市新成洞石槨墓の黒陶長頸壺は、胴部が球形で、頚部が直線的に立ち上がり先端で開く口縁部が付くもので、中期前半に置いて問題ないものである。したがって中期後半のAV式銅剣は、AⅢc式以降に降り得るのであって、AI式銅剣の年代幅には収まらないから、AV式およびその共伴土器（松菊里式）の年代、ひいては列島の弥生前期前半の実年代は、AⅡc・AⅢc式の年代（後述・前6～5世紀）を遡らない。

Ⅳ　遼寧式銅剣と細形銅剣の関係
－細形銅剣の出現年代について（「再考」ⅢDに対応）

かつて宮本氏は、朝鮮半島北部における遼寧式銅剣の組列、すなわち、I式－Ⅱa式－Ⅱb式－Ⅱc式－細形銅剣I式－細形銅剣Ⅱ式、およびI式－Ⅲa式－Ⅲb式－Ⅲc式のうち、I式―Ⅱa式―Ⅱb式、I式―Ⅲa式―Ⅲb式が遼寧式銅剣1式併行であり、遼寧式銅剣2式に併行するのは、一見形態的に類似するⅢ式ではなく、Ⅱc式－細形銅剣I式に併行するⅣa式－Ⅳb式であり前5世紀以前に遡ると主張した。それによって細形銅剣の出現を前5世紀まで遡らせた（宮本　2002）。

これに対し岩永は、遼西・遼東における遼寧式銅剣2式に併行するのは、形態的特徴を重視すれば、Ⅲa式－Ⅲb式－Ⅲc式であり、遼寧式銅剣1式から2式への転換が前5世紀であれば、I式からⅢa式への変化が前5世紀となるから、Ⅲ式と並行するⅡ式も前5世紀以降にくだり、Ⅱa式―Ⅱb式―Ⅱc式の変化を介した細形銅剣I式の出現年代はさらに下降するはずと主張した（岩永　2005）。

これに対し宮本氏は、遼西・遼東の遼寧式銅剣を型式細分し、そのIb式～2a式が半島のAⅡ・AⅢ式（宮本氏は（宮本2002）における半島出土遼寧式銅剣I式・Ⅱ式・Ⅲ式を、（宮本2003a）以降、AI式・AⅡ式・AⅢ式に変更した。）に併行すること、2a式の山東省杏家荘2号墓出土品（本稿図1－5）が前500年には製作されていたこと（宮本　2006）、半島のAⅡc式が遼寧の2a式に並行することから、AⅡc式に後続する細形銅剣の成立を前500年まで遡らせた（宮本　2008a）。2004年段階には遼寧の2式並行はAⅣa・AⅣb式としていたが、2008年にAⅣa・AⅣb式の年代を大きく変えた。

問題は、①遼寧と半島の遼寧式銅剣の併行関係、②遼寧2a式（半島AⅡc式・AⅢc式）の年代幅、③AⅡc式と細形銅剣との関係である。

① 半島の遼寧式と遼寧の遼寧式の併行関係

宮本氏は龍興里（図1−7。以下、図1を略す。）および平壌市新成洞（8a）での共伴遺物から、半島AⅡc式・AⅢc式を遼寧2a式併行とし（新成洞石槨墓出土の多鈕粗文鏡（8b）が、遼寧式銅剣2b式と共伴する梁家村2号墓の多鈕粗文鏡より古いとされているが、梁家村2号墓からは2b式銅剣1本しか出土しておらず、梁家村1号墓の剣は1a式、鏡は十二台営子1号墓鏡に似る古式のものであるから、梁家村2号墓ではなく寛甸県趙家堡子の2b式銅剣（6）・多鈕粗文鏡のことを指すのであろう。）、AⅡ式・AⅢ式を全体として遼寧1b式〜2a式に併行させた。しかしこの操作は、龍興里・新成洞を、遼寧Ib式をもつ鄭家窪子6512墓と、遼寧2b式を持つ梁家村2号墓（趙家堡子が正しいであろう）、細形銅剣BIa・BIb式をもつ諸遺跡とで挟み撃ちしたものであるが、併行関係の可能性は遼寧1b式〜2b式の幅を持つはずで、AⅡc式・AⅢc式に併行する型式を2a式に限定するには、1b式・2a式・2b式の年代幅が一定で相互に重複がないなどのいくつかの仮定が必要である。

② 遼寧2a式（半島AⅡc・AⅢc式）の年代幅

宮本氏は、遼寧2a式剣が出土した杏家荘2号墓（5）について、2003年には前6〜5世紀（宮本2003b）、2004年には前6世紀後半〜前5世紀前半としていた（宮本2004）。しかし、2008年には「遅くとも紀元前500年頃」と変更したほか、他の遼寧2a式剣について、遼西の三官甸では「前5世紀と考えられる青銅鼎が共伴」、東大杖子14号墓では春秋後期（570〜475頃か）の燕式青銅彝器と共伴と記述されていたが、記述の進行に従って、「定点が前500年」→「下限を前500年とする」と変化し、最終的に下限が最大100年古く固定されてしまった（宮本2008a）。この操作によって、2004年には前5世紀としていた細形銅剣の成立が前500年まで、最大で100年遡ることになってしまった。しかし遼寧2a式剣の下限年代が前500年に収まるのか、それ以降どこまで下り得るのかは依然として問題であり、三官甸や東大杖子14号墓の共伴遺物を重視すれば、前5世紀までの幅を見込むべきであろう。なお宮本氏はかつて三官甸の年代について前5世紀後半としていた（宮本2000）。

そこで、AⅢc式に先立つAⅢa式の年代観にも触れておく。AⅢa式の中央博蔵品（再4）が遼寧地方の遼寧式銅剣のどの型式に相当するかであるが、宮本氏は1b式相当とする。AⅢa式の形態が遼寧省錦西県寺児堡出土品に近いとみれば、この剣は銅柄I式を伴うので1b式に含めても良いかもしれないが、AⅢa式は、喀左南洞溝（春秋後期）・鄭家窪子6512号墓（前6世紀）の典型的1b式より突起が目立たなくなっており、宮本氏が2a式とした遼寧省建昌県東大杖子14号墓（春秋後期）・遼寧省凌源県三官甸（前5世紀）・遼寧省金県臥龍泉出土品とも形態上の大差がない。したがって1b式から2a式にかけての年代、すなわち前6世紀〜前5世紀の幅を見込んでおくべきであろう。この点からも、AⅢc式が前5世紀まで下る可能性が強くなる。

③ AⅡc式と細形銅剣との関係

宮本氏はこのAⅡc式の年代からただちに細形銅剣の成立年代を導き出すのであるが、初期細形銅剣BIa式（14）とAⅡc式（8a）の形態にヒアタスがあるのは否めない。確認しておくべきことは、半島の遼寧式銅剣から細形銅剣への型式変化状況である。いくつかの考え方があり、それ次第で細形銅剣の成立年代に大差が出てくる。

A.単系説。遼寧式銅剣のある1系統から細形銅剣が成立するとみる説。宮本氏はAⅡc式を祖形とし、直接に細形銅剣BIa式が成立するとみる。

B.融合説。遼寧式銅剣の2系統が融合して成立するとみる説。村上恭通氏は、細形銅剣の突起と刳形は岡内BIa式（宮本AⅡb式）、角張った関は「D型」（突起と繰り方を失い関が角張る懐徳大青山など=宮本2b式）の影響と考えた（村上　1997）。宮里修氏は、半島出土遼寧式銅剣について、琴谷洞タイプ（宮本AI・AⅢb）→松竹里タイプ（宮本AⅢa・AⅣa）→龍興里タイプ（宮本AⅢb・AⅢc・BIa・BⅡaの混合）の変化を考え、龍興里タイプの形態と孤山里タイプ（宮本AⅣb）の規格とが融合して細形銅剣が成立したとする（宮里　2006）。なお西浦洞タイプ（宮本AⅡa・AⅡb）は細形銅剣の祖形から外された。

融合説をとる場合、半島遼寧式のAⅡb式やAⅢc式と、遼寧遼寧式2b式や半島遼寧式のAⅣb式が年代的に重複する時期があるか否かの検討が必要となる。宮本氏はかつて、村上恭通氏の論を援用し、BIa式→BIb式→BIc式の変化の中で、関が丸みを帯びたものから直角気味の鋭角に収束するものへ変化するに際して、吉長地域の「D型」遼寧式

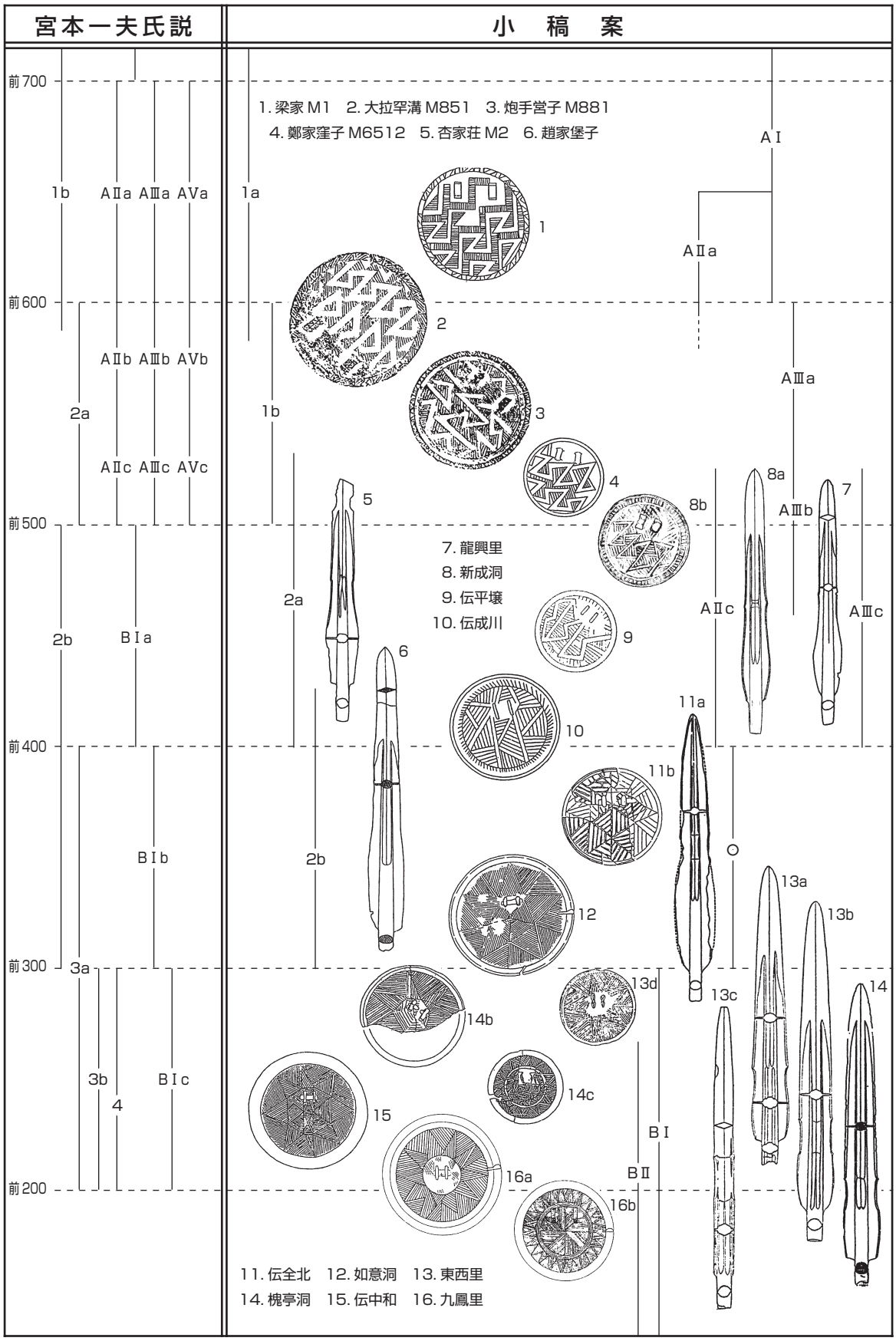

図1　遼寧式銅剣･細形銅剣･多鈕鏡の変遷(縮尺1/6)

銅剣との接触の結果の可能性を認めていたが（宮本2003a）、この時には細形銅剣の出現を前3世紀とみていたように、この論法を採る場合、2b式やAⅣa式の出現期以降まで細形銅剣の成立年代を下げる必要が出てくる。

単系説、とくに宮本氏の説の場合、AⅡc式には角ばった関は無いので、AⅡc式から直接にBIa式が成立するのであれば、BIa式の角張った関の出現については自生的変化とみることになろうが、形態変化上の飛躍を考えざるを得ない。しかし両者の間に数型式をかませるとスムースな変化で説明できる。

ここでは細形銅剣出現前後の銅剣（宮本氏の型式名を用いる）の形態変化と多鈕鏡（宇野隆夫氏の型式名を用いる。宇野1977）の内区形成に注目して、型式の組み合わせの変化を調べよう（図1）。

新成洞：AⅡc	+粗文鏡AⅡ（連続Z）
伝全北：中間形態	+粗文鏡BⅡ（不整形内区）
蓮華里：BIa・Ⅱa	+粗文鏡BⅡ（不整形内区）
槐亭洞：BIb	+粗文鏡BⅢ（多角形内区）・粗文鏡BⅣ（3区・円形内区）
南城里：BIa・b・Ⅱb	+ 粗文鏡BⅣ（3区・円形内区）
東西里：中間・BIa・b・Ⅱa・b	+粗文鏡BⅢ（多角形内区）・ 細文鏡（3区・円形内区）
九鳳里：BIa・b・c・d・Ⅱa・b・c	+ 粗文鏡（円形内区）・細文鏡（2区・円形内区）

新成洞のAⅡc式銅剣（図1−5。以下、図1を略す。）は、剣身両側が関に向けて弧を描いて窄まり関は鈍角である。伝全北の銅剣（11a）は、突起位置が高く剣身下半が膨らむ点でAⅢ式と類似し、関は鈍角である。蓮華里〜九鳳里の諸遺跡は、細形銅剣・多紐鏡ともに変異が次々と登場して共存し、定型的形式が卓越して収斂する前の状況を示している。銅剣では角張った関がほとんどであるが、東西里の5本中の2本（13a・13b）が、剣身全体の形態にAⅡc式の名残を残し、うち1本（13a）は突起以下の剣身両側がS字状のカーブを描き樋を持つ点でAⅡc式に近い。他の1本（13b）は刳方を持つが、基部両側が丸みを帯び関が鈍角な点が古式である。この2本はBIa式出現以降に残存したものであるが、BIa式出現に先立って存在した型式を推定する場合の手掛かりとなる。こうしてみると、新成洞のAⅡc式（8a）とBIa式（14）との間に伝全北剣（11a）や東西里剣（13a・13b）のような形態の型式を介するとスムースな型式変化が辿れることが判明する。なお、慶尚北道文唐洞1号木棺出土剣は、伝全北剣より突起位置が下がるが、剣身下半が膨らむ点でAⅢ式と類似し、関が丸みを帯びて収束する点ではAⅡ式と類似し、それらとBIa式の中間形態と言える。共伴土器は初期の水石里式であり、すでにBIa式が出現しているかどうかは微妙であるが、BIa式に先立って存在した型式の手掛かりとなる。

続いて、銅剣と並行して型式変化した多鈕鏡においても、新成洞鏡（8b）と、細形銅剣に伴う諸型式との間の関係を検討する。多鈕粗文鏡の主文様の変化は宇野隆夫氏が明らかにしている（宇野1977）。遼寧式銅剣に伴う複線表現・連続Z字文（AⅡ式）から伝平壌鏡（9・AⅡ式）を介して伝成川鏡（10）の複線表現・星形文（BI式）が成立するが内区は未成立である。続いて単線表現に変わり不整形な内区が成立する（BⅡ式、11b）。さらに五角形・六角形・八角形などの多角形内区が成立する（BⅢ式、12・14b・15）。宇野分類では、円形内区・円圏帯・外区の3区構成のBⅣ式（14c）が続くが、宇野分類提唱後の出土品からみるとBⅣ式と併存して内区・外区の2区構成で円形内区の個体（九鳳里、16a・16b）がある。東西里の多鈕細文鏡（図なし）は3区構成だが破片のため、円圏帯・内区の文様は不明である。九鳳里の多鈕細文鏡（16b）は2区構成で内区の文様からみてBⅢ式から派生したものであろう。

新成洞の多鈕粗文鏡（AⅡ式、8b）の主文様は複線表現・連続Z字文が1単位である。伝全北鏡（11b）は単線表現で不整形な内区が成立している（BⅡ式）。同じBⅡ式の蓮華里鏡は通常の細形銅剣を伴う中で最古式の粗文鏡であるが、新成洞のAⅡ式と、細形銅剣に伴うBⅡ式は文様の形態的ヒアタスが大きい。古式多鈕粗文鏡の主文様の変化は、Zを第3画に直角な線で繋ぐAI式（十二台営子・梁家1号(1)）→Zを第3画に鋭角な線でつなぐAⅡ式（大拉牢溝851号(2)・炮手営子881号(3)・鄭家窪子6512号(4)・新成洞（8b））と変化し、後者は連続Z字が複数条（大拉牢溝851号・炮手営子881号・鄭家窪子6512

号）→単数条（新成洞）へと変化する。新成洞の連続Z字状文はまだ小振りであるが、大型化すると伝平壌鏡（AⅡ式、9）となり、Z字形が解体し星型に再構成されると伝成川鏡（BI式、10）となり、複線表現が単線表現に変化してようやくBⅡ式（11b）となる。したがって、新成洞のAⅡ式（8b）とBⅡ式（11b）との間に伝平壌鏡（9）や伝成川鏡（10）を介さなければスムースな型式変化が辿れないことになる。

以上の多紐鏡の型式変化の検討によって、半島遼寧式銅剣AⅡc式とBIa式との間には数型式の銅剣の存在を推定することが妥当であることが裏付けられる。したがって、AⅡc式の年代が前500年から前5世紀代としても、それをただちに細形銅剣の成立年代とはできないことになる。

なお、ここでは宮本氏の遼寧式銅剣・細形銅剣の年代観を取り上げたが、岡内氏はほぼ同じ資料に対して細かい年代を与えている。しかも論考が新しくなるにつれて個々の銅剣の年代観が遡上しているので、年代の推移を確認しておこう。⇒の左が2004年論考、⇒の右が2006年論考（岡内2006）の年代観である。

金谷洞（宮本AI）	;前770～670	⇒前880～770;	100～110年遡上
西浦洞（宮本AⅡa）	;前670～570	⇒前770～670;	100年遡上
伝成川（宮本AⅡc）	;前380～320	⇒前670～570;	250～290年年遡上
中央博（宮本AⅡc）	;前380～320	⇒前570～475;	155～190年遡上
中央博（宮本AⅢa）	;前475～380	⇒前670～570;	195～190年遡上
龍興里（宮本AⅢc）	;前570～475	⇒前670～570;	95～100年遡上
平壌附近（宮本AⅢb);		⇒前570～475;	
沙川洞（宮本AⅣb）	;前320～221	⇒前570～475;	250～254年遡上
比来洞（宮本AI'）	;前880～770	⇒前880～770;	無変化
松菊里（宮本AVa）	;前770～670	⇒前770～670;	無変化
伝春川（宮本AⅢa）	;前570～475	⇒前670～570;	95～100年遡上
伝平壌（宮本AⅡb）	;前320～221	⇒前670～570;	349～350年遡上
全州博（宮本AⅢb）	;前380～320	⇒前570～475;	155～190年遡上
洛東江（宮本AⅢb）	;前380～320	⇒前570～475;	155～190年遡上

細形銅剣の出現年代であるが、文章記載では2004aでは「前5世紀初めには製作されていた可能性が高い」、2004bでは「早ければ紀元前6世紀初めの南洞溝に並行する春秋後期初、遅くとも紀元前5世紀初めの鄭家窪子並行の春秋後期末」とある。2006では2005aと同じ表現を取りつつ、岡内氏が1982文献で最古式細形銅剣（前320～221）とした伝平壌（宮本AⅡb）の位置付けが、前670～570と350年遡上しており、2004b文献で細形銅剣に含めた上紫浦里支石墓剣が前570～475に置かれている。個々の銅剣の年代がこのように100～350年も大幅に遡上できる根拠が示されておらず、検討の対象となしえないのは残念である。

V　3点セットの上限年代について（「再考」ⅢEに対応）

前3世紀中頃～後半とされる燕下都・辛荘頭30号墓出土の銅戈を年代の定点として、朝鮮半島における銅剣・銅矛・銅戈の3点セットの出現年代を押さえる問題については、辛荘頭30号戈が半島出土の類似銅戈と、型式変化および年代において、いかなる関係にあるかが決め手となる。

宮本氏は「前3世紀中葉以前に半島青銅器第3段階の実年代がさかのぼる」と述べるから、辛荘頭30号戈と同年代あるいはそれを遡る銅戈があるとみなしていることになり（宮本2004a）、春成氏は明確に、辛荘頭戈は合松里・素素里・南陽里併行であって、草浦里・九鳳里はさらに遡ると見ている（春成2004）。

岩永（2005）は、「九鳳里・草浦里の段階の銅戈と合松里・素素里・南陽里の段階の銅戈とを型式学的に明瞭に区別し、辛荘頭の銅戈がどちらに近いかを談じるのは困難」であるが、列島で銅戈が出現する弥生前期末～中期初頭は、有耳の矛、複数節帯の矛、鋒が伸び始めた矛、有文で内が小さい銅戈が存在し、半島で3点セットが出現する段階より下降することが確かである点に注意を促しておいた。

① 朝鮮式銅戈の出現年代

近年、朝鮮式銅戈の祖形を燕ないし遼寧地方の銅戈に求め、その年代観に基づいて朝鮮式銅戈の出現年代を遡上させる論が盛んである。

近藤喬一氏は、燕戈を朝鮮式銅戈の祖形とし、前者の年代が前332～前222年となることから、後者の初現を「紀元前四世紀後半というのは新しすぎるだろうか」とした（近藤）。かりに燕銅戈が朝鮮銅戈の祖形だとしても、型式変化に要した時間等を考えれば、前4世紀後半は新しすぎるどころか古すぎるのが明らかである。近藤氏が前4世紀後半としたのは、辛荘頭30号墓の被葬者を秦開とし、彼が東胡を追い朝鮮の領域にまで至った時（前300～前280年頃）に入手したのであれば、すでにその前に出現していなければならないと考えを進めたからに違いない。推定に推定を積み重ねた危うい論であると言わざるを得ない。

小林青樹氏は、遼西式銅戈を朝鮮式銅戈の祖形とし、前者から後者がただちに出現したとみる（小林他　2007）。2008年には遼西式銅戈の下限年代（前4世紀前半）から朝鮮式銅戈の出現年代を「遅くとも前4世紀前半」としさらに遡る可能性を考えた（小林2008）。かりに遼西式銅戈が朝鮮式銅戈の祖形であっても、両者の形態的ヒアタスは大きく、間に数型式入れなければ変化が理解できない。小林氏は、戦闘法の転換によって「遼西式の大きく開く翼状の援の末端部分が一気に幅狭になった」とし変化の飛躍を説明しようとしているが、朝鮮式銅戈の出現年代を遡上させるための強引な説明である。

宮本一夫氏の御教示（2009年7月）によれば、遼東の某遺跡で遼西式銅戈と朝鮮式銅戈の中間形態の銅戈が出土しているが、残念ながら共伴遺物の構成・年代ともども未発表であり、今後この銅戈が年代的にも両者の中間に位置することを確認する必要がある。かりにそうだとした場合、遼西式銅戈より胡の広がりが狭くなってはいるが、なお朝鮮式銅戈との間には1～2型式存在しえるので、遼西式銅戈と朝鮮式との間には2～3型式が存在する可能性が強くなる。したがって、小林氏のように遼西式銅戈の年代をただちに朝鮮式銅戈の成立年代とみなすことはできない。

また小林氏は朝鮮式銅戈の変遷について、遼西式銅戈が朝鮮式銅戈の祖形であることを前提として、樋が先端で離れ、樋の下端形状が三角形となり、胡が翼状に広がり幅が広いものが古いと断じた（小林他　2007）。2007年には、樋が先端から下がった位置からつく遼西式銅戈を祖形にB型（援が太く樋が援の途中までのびる）がまず成立し、続いて細形銅剣との異種間交流でA型（援が細く樋が先端近くまでのびる）が成立し、両者がほぼ並存していたとした（小林他　2007）。2008年には、2007年のB1型（樋先端が閉じる）をA4～6類、B2型（樋先端が開く）をA1～3類、A型をB1～3類、援が細く樋が長く先端が閉じるものをB4～6類とし（小林2008）、相互の系統関係と変遷を図示しているが、一括資料における共伴遺物と不整合であり型式変化の検証に成功していない。

さらに小林氏はそうした変遷観を前提として、辛荘頭30号戈の樋の下端が直線的に関に接することから、朝鮮式銅戈の中で「型式学的に新しい」（小林他　2007）、あるいは「A3類に相当する新式の銅戈」と断じ、朝鮮式銅戈の出現時期に関わる資料ではないと見た（小林2008）。しかし遼西式銅戈と朝鮮式銅戈との間に形態的ヒアタスがあり、朝鮮式銅戈のうち共伴遺物からみて現状で最古の九鳳里出土品では、身幅が広く、樋が短く、胡が左右に広がる個体と、身幅が狭く、樋が長く、胡が左右に広がらない個体とが共存していることから、遼西式から朝鮮式に至る型式変化が一系列ではなかった可能性が高い。したがって、身幅が広く、樋が短く、胡が左右に開く辛荘頭30号戈を、樋の下端が左右に開かない点を根拠にして新式と断じることはできない。

この問題―朝鮮式銅戈の出現年代―の導きの糸となるのが後藤直氏の論である（後藤2007）。後藤氏は朝鮮半島出

土の銅戈を分類して変遷の傾向と地域差を明らかにした。氏の論でも半島の銅戈の出現期（第4期前半）から、太身、細身、樋先端が離れて脊に鎬を付すもの、樋先端が合わさり脊に鎬がないもの、などが出揃っており「類型相互の比較のみで編年することは困難」であることを確認している。しかし分布を考慮すると、北半部では無紋・太身が多く、脊上鎬は有るものの方が多い。西南部では無紋・細身が多く、脊上鎬は無いものの方が多い。東南地域では有紋・小型が多い。このことから、無紋・太身のI①類・I②類が西北部で出現して各地に広がり、南部に広がったI①類・I②類から西南部で無紋・細身のII①類・II③類が派生したこと、有鎬が西北部で先に出現し、銅戈の南伝とともに無鎬の比率が高まったことを指摘した。

辛荘頭30号戈は、援長・闌幅・胡の広がりが大きいいっぽう、樋長が援長に対して短く、樋下端が開かないという特徴があり、いずれも朝鮮銅戈の変化傾向に照らすと初期の銅戈であることを示している。そして、朝鮮銅戈の祖形を燕II式銅戈とする場合でも、遼西式銅戈とする場合でも、この特徴から最初期の朝鮮銅戈と認められるという。

以上の後藤氏説を大筋で妥当とすれば、辛荘頭戈は九鳳里・草浦里段階でもなければ、合松里・素素里・南陽里段階でもなく、さらに遡る型式となるから、その年代（前3世紀中頃～後半）は、朝鮮銅戈の上限となる。半島における3点セットの出現年代はそれ以降、列島における3点セット出現=前期末の年代はさらに下ることになる。

② 列島における朝鮮式銅戈の出現

岡内氏は、朝鮮式銅戈の編年を再検討し、内の長さ・幅・厚みで3大別しI式・II式・III式を設定したが、列島には当初I式が舶載され、II式の舶載は一段階遅れるとみている（岡内2008）。しかし、列島に銅戈が出現する前期末段階ですでに扁平小型で内が小さい型式が出現しているから、当初からII式並行期である。したがって朝鮮式銅戈の出現年代をただちに列島における朝鮮式銅戈の出現年代とすることはできない。岩永（2005）はすでに、列島で銅戈が出現する弥生前期末～中期初頭は、有耳の矛、複数節帯の矛、鋒が伸び始めた矛、有文で内が小さい銅戈が存在し、半島で3点セットが出現する段階より下降することが確かである点に注意を促しておいた。

VI　遼寧・朝鮮における青銅器の型式変化と分布変遷の歴史的背景

宮本氏は2004年段階では、遼西・遼東における遼寧式銅剣1式から2式への転換を前5世紀、半島での遼寧式銅剣から細形銅剣の成立を前5世紀と把握したうえで、前5世紀段階の燕の遼西西半部への進出という「軍事的な緊張関係のなかで、遼西の東半部から遼東ではII式遼寧式銅剣が生まれ、朝鮮半島では細形銅剣が生まれる」と見れば、遼寧式銅剣から武器化した細形銅剣への変化の「歴史的因果関係も素直に理解できる」とした（宮本2004）。

2008年段階には、遼寧式銅剣の年代について、2a式の定点を前500年、2b式が前5～4世紀、3a式が前4～3世紀、3b式が前3世紀、4式が前3世紀とし、それとの併行関係で朝鮮半島における細形銅剣の成立を前500年、銅戈・多紐細文鏡の成立を前300年と押さえたうえで、「遼東の遼寧式銅剣2b式以降の型式変化や細形銅剣の型式変化は、前五世紀における燕の遼西への領域拡大や間接支配と軌を一にする動きであり、燕と接触する地域での軍事的な緊張による」とした（宮本2008a）。

ここであらためて遼西における遼寧式銅剣の分布の推移を概観すると、1a式が約20点、1b式が約40点と多いのに対し、2a式は7点と激減しており、2a式の存続期に燕との接触によって在来文化の衰退が引き起こされたとみられる。宮本氏は、戦国前半期には大凌河流域まで「燕化現象」が及んだと指摘しているから（宮本2000）、2a式の主要存続期は前5世紀まで下るとみた方が良い。ところが、IV②で述べたように宮本氏の年代観では、2a式の下限年代を前500年としているから前6世紀を主要時期と考えているのであろうが、それでは遼西における銅剣激減期が燕勢力の波及前になってしまうのである。また、宮本説では前500年に、2a式銅剣と半島独自の細形銅剣が出現するが、前6世紀に遼寧に2a式銅剣、半島にAIIb・AIIc・AIIIb・AIIIc式銅剣という類似型式が併存していたのに、前5世紀の燕の東方への勢力拡大に先

駆けて、遼寧地域では2a式から2b式へ、半島ではAⅡc式から半島独自の細形銅剣が成立する、すなわち遼寧地域と半島との関係がこの時点で疎遠になる必然性に乏しい。

むしろ、前5世紀段階では、遼寧で遼寧式2a式、朝鮮半島でⅡc・Ⅲc式という類似型式が成立していたが、前4世紀代に燕の影響力が遼西から遼東に拡大するにつれて、遼寧と半島との関係がしだいに疎遠となり、遼寧では2b式銅剣が成立するのに併行して、半島ではⅣ③で述べたように、多紐粗文鏡でも銅剣でも半島独自の型式が模索されたと考える方が良い。前300年頃の燕の遼東郡の設置前後に遼東では2b式銅剣が消滅し、以後、遼東東半部や吉長地区で遼寧式3式や4式が展開するが、半島におけるBⅠa式銅剣の成立は、それと並行した現象と評価でき、戦国後半期における燕の東進に伴う、遼寧と半島との関係の疎遠化、情報交換の希薄化を背景とする地域色の顕在化と見る方が、歴史的因果関係が素直に理解できるであろう。

こうして、細形銅剣の成立－水石里式の成立－板付Ⅱ式の成立は前300年頃、Ⅴで述べたように半島における銅剣・銅矛・銅戈セットの成立は次段階、列島における銅剣・銅矛・銅戈の出現－前期末は前3世紀後半以降、という「再考」における見解に変更の必要はないのである。

※謝　辞※
執筆に当たり種々御教示頂いた武末純一氏に篤く感謝申し上げます。（2009年8月27日）

※参考文献※

岩永省三　2005「弥生時代開始年代再考」『九州大学総合研究博物館研究報告』第3号
宇野隆夫　1977「多鈕鏡の研究」『史林』60巻1号
岡内三真　2006「朝鮮半島の青銅器」『歴博国際シンポジウム2006古代アジアの青銅器文化と社会―起源・年代・系譜・流通・儀礼―発表要旨集』
岡内三真　2008「朝鮮と倭の細形銅戈」『王権と武器と信仰』同成社
後藤　直　2007「朝鮮半島の銅戈―燕下都辛荘頭30号墓出土銅戈の位置付け―」『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』
小林青樹・石川岳彦・宮本一夫・春成秀爾　2007「遼西式銅戈と朝鮮式銅戈の起源」『中国考古学』第7号
小林青樹　2007「東北アジアにおける銅戈の紀元と年代―遼西式銅戈の成立と燕・朝鮮への影響―」『新弥生時代の始まり』第3巻
近藤喬一　2006「燕下都出土の朝鮮式銅戈」『有光教一先生白寿記念論叢』高麗美術館研究紀要5
庄田慎也　2006「弥生時代の始まりはいつか」『史葉』創刊号
武末純一　2004「弥生時代前半期の暦年代―北部九州と朝鮮半島南部の併行関係から考える―」『福岡大学考古学論集―小田富士雄先生退職記念―』
田中良之・溝口孝司・岩永省三・Tom Higham　2004「弥生人骨を用いたAMS年代測定（予察）」『日・朝交流の考古学』九州考古学会・嶺南考古学会
宮里　修　2006「朝鮮式細形銅剣の成立過程再考―東北アジア琵琶形銅剣の展開の中で―」『第18回東アジア古代史・考古学研究交流会予稿集』
宮本一夫　2000「戦国燕とその拡大」『中国古代北疆史の考古学的研究』
宮本一夫　2002「朝鮮半島における遼寧式銅剣の展開」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店
宮本一夫　2003a「東北アジア青銅器文化からみた韓国青銅器文化」『青丘学術論集』第22集
宮本一夫　2003b「弥生の実年代を考古学的に考える」『東アジアの古代文化』117
宮本一夫　2004「青銅器と弥生時代の実年代」『弥生時代の実年代』学生社
宮本一夫　2006「杏家荘2号墓出土の遼寧式銅剣」『東方はるかなユートピア―煙台地区出土文物精華―』山口県立萩美術館・浦上記念館
宮本一夫　2008a「遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える」『史淵』第145輯
宮本一夫　2008b「細形銅剣と細形銅矛の成立年代」『新弥生時代の始まり』第3巻
村上恭通　2007「遼寧式（東北系）銅剣の生成と変容」『先史学・考古学論究』